

# ゆうあい報 おだぴたる



社会医療法人  
祐愛会織田病院 ODA REGIONAL MEDICAL CENTER

発行者 祐愛会織田病院企画室  
責任者 織田 正道

## DXを追い風に、2026年もさらに前進 — 2026年グループ方針 —

理事長 織田 正道

人口減少と超高齢社会が一段と進行する2026年を迎え、医療・介護を取り巻く環境は2040年に向けて大きな転換点にあります。医療需要の質と量が変化中、私たちに、限られた人材と資源を最大限に活かしながら、地域に必要とされ続ける医療・介護を安定的に提供していくことが求められています。その鍵となるのが、DXを「追い風」として活用する姿勢です。

2026年度診療報酬改定では、ICTやAI、IoT機器の活用による業務効率化や負担軽減を前提に、看護要員配置や医師事務作業補助体制の柔軟な評価が示されました。これは、テクノロジーを適切に活用し、医療の質と安全を確保できる体制を構築する医療機関を、制度面からも後押しする明確なメッセージと受け止められます。

当グループでは、「医療DX」と並行して、現場発の「病院DX」を推進してきました。中でも生成AIを活用した電子カルテ文書作成支援や情報共有の高度化は、医師・看護師をはじめとする医療スタッフの負担軽減に寄与すると同時に、患者さんと向き合う時間を確保するための重要な基盤となっています。DXは省力化のためだけの手段ではなく、人の力をより活かすための投資です。

2040年に向けて重要なのは、急激な変化による混乱を避けつつ、着実に前進する「ソフトランディング」の発想です。DXを追い風に、業務効率化と医療の質向上を両立させながら、急性期から慢性期、在宅・介護まで切れ目のない支援体制を整えていくことが、持続可能な地域医療につながります。人材を守り、育て、働きがいをもつことも、その重要な一部です。

本年も、地域社会を支える総合ヘルスケアグループとして、DXを現場に根付かせ、2040年への確かな道筋を進めていくことを目指し、全員一丸となって取り組んでまいります。

### ◎2026年グループ方針

「住み慣れた地域で自分らしく最後まで」の実現をめざし、急性期医療から在宅療養まで、保健・医療・介護の各分野が一体的に提供できるように全分野にわたり、人材育成、DX推進し、『総合ヘルスケアシステム』構築を図ります。

### ◎保険分野

いつまでも元気で活躍できるエイジレス社会の実現に向け生活習慣病およびロコモティブシンドロームの予防・改善に継続的に取り組むとともに、DXを活用した健康データの利活用や行動変容支援を推進すると共に、並行して行政との連携を強化し、地域全体で支える予防・健康づくり体制の充実を図ります。

### ◎医療分野

織田病院と高島病院との入院医療の連携強化を図り、急性期・回復期・慢性期機能がシームレスに連携する体制構築を推進すると共に、退院後のケアの継続を図るため、「かかりつけ医機能（面連携）」を促進し地域包括ケアシステムを全面的に支援します。それらに並行し、AI・テクノロジーを活用し、DXを本格化します。

### ◎介護分野

いつまでも安心して在宅での暮らしができるように地域包括ケアシステムを全面的にバックアップします。そのためにも各種介護サービスが機能的・効率的に連携できるように、デジタル情報の一元化・共有化を図り、業務のDXを推進します。

### 入院中）テクノロジー活用し日常業務を簡易化・効率化



# 令和7年秋の叙勲 旭日小綬章受章

このたび織田正道理事長が旭日小綬章を受章されました。今回の叙勲は、長年にわたり国・地域・医療現場をつなぐ立場から、持続可能な医療体制の構築と地域医療の発展に尽力してきた功績が高く評価されたものです。理事長は全日本病院協会において副会長を10年間務め、要職在任は通算20年に及びます。厚生労働省の各種検討会では、医療計画、地域医療構想、外来・在宅機能、かかりつけ医機能、低炭素化などの政策形成に現場の知見を交え意見を述べてられました。

地域においては佐賀県病院協会会長として人材育成を目的とした各委員会を創設・運営すると共に、県医師会役員や地区医師会長も歴任されています。また、救急医療から在宅までを切れ目なく支える「治し支える医療」を実践し、医療DXや国際人材育成にも先進的に取り組んでられました。今後は、近未来の医療を担う若手医療人の育成に、より一層力を尽くしていかれることを期待したいと思います。

## 初期臨床研修2年連続フルマッチ!!!

臨床研修センターセンター長 織田 良正

10月23日に2025年度医師臨床研修マッチングの最終結果が発表され、織田病院初期臨床研修プログラムは初年度（2024年度）から2年連続フルマッチを達成しました。これもひとえに、臨床研修センター所属の多職種メンバーをはじめ当院スタッフ全員の日頃からの地域医療に懸ける熱意の賜物と感謝いたします。

何と言っても2025年は「基幹型初期研修」の1年でした。初年度からフルマッチで内野先生、松浦先生の2名の初期研修医を迎えましたが、スタートしたばかりの研修を私よりもむしろしっかりと2人が支えてくれました。日々の医師としての業務、目標の手技、学会発表、救急・当直対応など色んな壁を乗り越え今ではとても頼もしく、まだ1年も経っていませんが織田病院にとって不可欠の存在です。

織田病院の初期研修は、研修期間だけの短期的な「タイパ、コスバ」は気にしてません。命は24時間ですから時間内ではおさまりきれない大切なこともたくさんあります。短期的には一見「タイパ、コスバ」がよいように見えることが、長期的にはその人にとって、とてつもなく「タイパ、コスバ」が悪くなる場合があることを指導する側ももっと意識しないといけないのではないかと考えています。世界一の野球選手が言っていました。「無駄なことは結局無駄じゃない、遠回りすることが一番の近道」だと。世界一の選手が真剣にいうのですから何よりも説得力があります。

おかげ様で医学生の病院見学も年々増えています。その期待に応えられるように、「地域医療の最前線で最先端の初期研修」をテーマに皆でよりよい研修にアップデートしていきたいと思えます。



## 高島病院に 「白石がんサロン歌垣」が開設されました

末岡未来型医療研究所 所長 末岡 榮三朗

がんサロンは、がん患者さんやご家族の方が療養に関する不安や生活の悩みを気軽に相談できる交流の場として佐賀県各地で開設されています。しかしながら、鹿島、白石地区にはこれまでがんサロンのような交流の場はありませんでした。そうした中で、患者さんやご家族が安心して語り合える場を杵藤地区にも提供したいと、クレスサポートの方々の支援により、令和7年9月に高島病院内に「白石がんサロン歌垣」が開設されました。がんサロンは、医療的な判断を行う場ではなく、体験者同士が語り合い、情報を共有することで心の負担を軽くすることを目的としています。サロンでは、「個人情報を外部に漏らさない」「医療判断に踏み込まない」「営業行為や宗教勧誘をしない」といったルールが設けられており、安心して参加できるよう配慮されています。参加費は無料で、各地域の自治会館や病院、多目的室などで定期的に開催されています。

### クレスサポートの活動

クレスサポートは、医師と市民有志によって2006年に設立されたNPO法人です。「がん医療の発展」「患者支援」「子どもたちへのがん教育の推進」を目的に、さまざまな活動を行っています。団体名の「クレス」はドイツ語で「がん」を意味し、その名の通り、がんに関する幅広い支援と啓発を行っている団体です。主な活動内容としては、がん予防の啓発、がんピアサポーターの養成、がん教育支援員の育成と学校への派遣、がん関連図書出版、学術研究の支援などがあり、医療と市民をつなぐ大切な役割を担っています。特に、県内8カ所で運営されている「がんサロン」は、クレスサポートの中でも重要な取り組みのひとつです。



### 県内に広がる多様ながんサロン

佐賀市の「元気」、吉野ヶ里町の「虹」、お寺で開かれる「浄照寺」、白石町の「歌垣」、上峰町の「とっころ〜と」、有田町の「クローバーの会」、伊万里市の「ひだまり」など、県内各地に特色あるサロンが広がっています。地域の自治会や医療機関と連携しながら、どなたでも参加しやすい環境づくりが進められています。たとえば、佐賀市大財2区自治会が主催する「元気」は、自治会長でありクレスサポート理事長でもある吉野徳観さんが中心となって立ち上げたサロンです。医師をゲストに迎えた講話や、参加者同士のおしゃべりを通じて、がん検診の大切さを知るきっかけにもなっています。

### 参加者の声が示す「必要な場所」

がんサロンは、実際に参加された方々から高い評価を受けています。たとえば、乳がんの治療方針に悩んでいた女性は、サロンで先輩患者さんの体験談を聞くことで、治療の選択に大きな助けとなったそうです。また、抗がん剤治療で髪が抜けた女性は、サロンで中古ウィッグの無料レンタル制度を知り、経済的な負担が軽減されたと話しています。こうした体験談からも、がんサロンが単なる交流の場ではなく、生活に直結する情報を得られる大切な支援拠点であることがわかります。

### 地域で支えるがん支援の未来

佐賀県は、がんによる死亡率が全国的に高い地域とされており、早期発見や正しい知識の普及が課題となっています。クレスサポートは「がんにならない」「がんに負けない」「がんを伝える」という基本方針を掲げ、地域全体でがんと向き合う文化を育てようとしています。がんサロンは、その中心となる取り組みとして、患者さんやご家族が孤立せず、地域で支え合う仕組みを形にしています。今後も、佐賀のがん支援の輪がさらに広がっていくことが期待されています。

## 南砺市民病院見学を終えて

総合診療部 家浦 峻

今回、富山南砺市にある私の古巣、南砺市民病院に織田病院の初期研修医2名を案内した。今回の研修で最も彼らに体験して欲しかったことは「地域医療が日本全国同じところもあれば違うところもある」という点である。都市規模や高齢化率が似ていれば必ずと患者層も似ており、南砺市は鹿島市よりさらに高齢化率が高いとされているが、入院している患者の疾患については織田病院とそれほど違いはない。ただ、人の気質は異なり、九州の人間は温暖な気候もあって温和でおおらかな人が多いが、北陸では勤勉で我慢強い人が多い。方言も同じ九州でも県をまたげば細かいところは違うが、それが北陸という離れた土地では独特のイントネーションに加え、例えば医学的に倦怠感を表す言葉の表現も「たいそい」「ちきない」などバリエーションに富んでいる。そして気候である。北陸で冬に雪が降ることは当たり前で、それが前提の上で生活が成り立っている。つまり患者の「層」は同じでもそこに住む人のバックグラウンドにより「気質」の違いが生じている。そしてこと地域医療についてはその背景を理解しなければ本当の意味で患者を理解することは困難なのである。

さて、現在織田病院の初期研修医2名は2人とも九州出身であり、九州以外の病院は未知数であったろう。2人とも大変優秀な研修医だが、そんな2人だからこその外の世界を見てもらい、大いに刺激を受けてもらうとともに、今自分が研修している織田病院という環境が恵まれたものであることを認識してもらえればと考えていた。結果的に病院研修に加え北陸の海の幸や厳しい寒さも経験してもらえ、大いに刺激になったようであった。そして地域医療の核の部分の類似点を感じつつも、南砺市民病院という異文化に触れ、織田病院の研修を良くしていこうというモチベーションにつながっていた。彼らの熱意や貪欲さが織田病院研修の発展に寄与し、今回の研修がそのモチベーションの一助となれば幸いである。



## サイバー攻撃を想定したBCP訓練

サイバーセキュリティ委員会 中村 知弘

2025年8月27日、ランサムウェア感染により電子カルテなどの院内システムが全面停止した状況を想定した、サイバーセキュリティBCP訓練を実施しました。近年、医療機関を標的としたサイバー攻撃は全国的に増加しており、診療機能の停止が患者さんの生命や安全に直結するリスクも指摘されています。こうした背景を踏まえ、非常時においても診療を継続し、患者さんの安全を守る体制を確認することを目的として本訓練を行いました。

今回の訓練は、医事課職員の初動対応、誘導・受付・会計・電話対応の担当ごとに行いました。初動対応では、事務室で電子カルテ使用中にランサムウェアの警告画面が表示されるという想定から開始し、各部署でシステム障害を確認後に情報管理室への連絡、LANケーブルの切断やWi-Fiの停止、上司・対策本部への報告などを実施。その後、BCP(事業継続計画)発動後の外来患者対応、業務の紙運用への切り替えなど段階的に訓練しました。患者役を交えた実践的な訓練により、説明時の言葉選びや患者動線の整理、職員間の情報共有の重要性を改めて実感する機会となりました。見学された外部有識者からは、「机上訓練では得られない臨場感があり、現場対応力の向上につながる」との評価をいただいています。

今回の訓練を通じて、患者さんへの案内方法の統一や応援職員への情報共有、BCP発動判断の基準整理など、今後に向けた課題も明確になりました。



織田病院薬剤科  
宮崎 圭介



医療DXは、今後避けては通れない道である。だからこそ、適切な医療DXが重要だと感じた。単に何でもデジタル化するのではなく、「業務の見直し」や「無駄の削減」を行ったうえで、必要な部分にDXを取り入れ、効率化を図ることが求められる。デジタル化そのものを目的とするのではなく、あくまで業務効率化の手段であることを正しく理解しなければならない。そのためにも、生成AIなどのデジタルツールに対する抵抗感をなくし、まずは使ってみることから始め、日常業務と医療DXを結びつけていきたい。

織田病院4階病棟  
上滝 公彦



これからの生産人口減少は明確であり、政府の方針からもここ数年から10年以内に医療DX、生成AIの技術は躍進していくものと考えます。医療分野において使わない選択肢はない技術であり、職員一丸となって学ばなければならないと考えます。業務効率化の実現は、患者と向き合う時間を取り戻すための重要なツールであり、今回学んだことを看護の質の向上に繋がれたらと思います。

訪問看護ステーション  
馬場 翔



研修を受けてみて、DXという言葉は自分にとって少し大きく、身構えてしまうものだと感じました。だからこそ、いきなり何かを大きく変えるのではなく、まずは訪問スケジュール管理や書類業務など、身近なところから改善していきたいと思いました。業務の流れを整え、スタッフが余裕をもって訪問に向かい、利用者さんに向き合う時間を確保できるよう、現場に無理のない形でコツコツ取り組んでいきたいと思っています。

## 医療DX 人材育成研修



高島病院事務管理部  
香月 初美



医療DXの最先端に行く病院の貴重な講義を受ける事ができ、非常に感銘を受けた。当院は電子カルテではなく、手間のかかる作業や重複した仕事も多いのが現状である。研修で学んだ事を実践していくには簡単な事ではないが、少しでも業務改善や効率化に繋がるように他職種で協力しDX化を考えていきたい。また、生成AIやchat GPT活用にも挑戦していきたい。

高島病院栄養管理部  
島ノ江力翔



医療DXを通じて、デジタル技術やAI技術を取り込んだ作業の効率化が医療分野でも着々と進んで来ると実感しました。他分野だけでなく医療分野においても個人情報や機密情報の露洩はあってはいけないのでネットリテラシーやAIの取り扱い方は正しく学んで正しく使うべきだと思います。今後は医療DXで学んだことを日常業務においても活用できるように心掛けたいと思います。





## 【生成AIコミュニティ (ゆるAI会)】 生成AIを、もっと身近に、もっと気軽に

麻酔科 織田 寛子

「生成AIをゆるっと使ってみる」院内コミュニティ、ゆるAI (ゆるあい) 会の紹介です。

私自身、仕事で論文をまとめたり資料を作るだけでなく、プライベートでも毎日AIを使っています。「冷蔵庫の余り物で何が作れる?」「今度の旅行のしおりを作って!」「ちょっと断りにくいメールの文面を考えて……」なんて相談を投げかけることも。少しズレた答えに笑いながらも、今では公私ともに欠かせない「相棒」です。

この便利さと楽しさを皆さんと共有したい。もっと活用してほしい。職種を越えて「これ、AIでどうかなるかな?」と試せる場を作れたらいいな。そんな思いから、このコミュニティを立ち上げました。

ちなみに「ゆるAI会」という名前は、法人名「祐愛会」に「ゆるく始めて、ゆるやかにつながる」と「AI」を重ねたものです(ChatGPTが案を出してくれました!)。無理なく始めて、楽しく続けられる場を目指しています。

- ・仕事の効率化に: 膨大な資料の要約、スライド作成、メールの代筆
  - ・日々の暮らしに: 週末のお出かけプラン、献立の提案、趣味の調べ物
  - ・創作や遊びに: オリジナル画像作り、ちょっとしたゲーム作成、読書感想の整理
- など、使い方は無限大です!

### ゆるAI会の主な活動内容

1. 勉強会: 当院SEの寺井さんが中心となり、不定期で勉強会・ワークショップを開催。事例紹介だけでなく、実際にその場でAIを動かす体験を企画しています。
2. 掲示板(デジタルノート「Notion」): 業務でのAI活用のTipsだけでなく、「AIで作ったレシピ」や「旅行プラン」など日常での活用術を公開中。AIリテラシーを高め、安全に使うためのコツも解説しています。
3. アンケート: Notionのアンケートで皆さんの「こんな風に使ってみた!」という報告や声を集め、共有する仕組みを作っています。お互いの知恵を役立てる場にしたいと考えています。ちょっとしたコツを知るだけで、日々の業務も暮らしもぐっと楽で楽しくなります。難しいことは抜きにして、まずは一度覗いてみませんか?



## 生成AI座談会

情報管理室 寺井 一色

今年度から新たな取り組みとして生成AIに関する勉強会を開催しています。勉強会の目的としては、「生成AIでどのようなことができるのか」「どのような場面で役立つのか」といった利便性を、職員の方々に知っていただくことです。

勉強会では、生成AIの基本的な仕組みを解説するとともに、冷蔵庫の中の写真からの献立の作成やレシピの提案、旅行プランの作成、語学学習のサポートなど実際の日常生活での活用事例に加えて実際に業務で生成AIを活用している職員の方からも勉強会で登壇していただき、活用事例を紹介していただきました。また、患者向け説明文や掲示物の表現を分かりやすく整える際や、文章の言い回しを考える場面でも活用が可能です。

勉強会では、こうした身近な使い方を中心に紹介し、生成AIを特別な技術ではなく、日常業務の中で気軽に活用できる存在として理解していただくことを大切にしています。

一方で、生成AIを利用する際の個人情報や患者情報、機密情報を入力しないなど、情報セキュリティ上の危険性や誤った情報を出力するハルシネーションなど生成AIを安全に利用するための注意点についても勉強会を通じて共有し、安心して活用できる環境づくりを進めています。

# 「わくわく医療体験」の感動を全国へ！ 第3回 病院ファンづくり甲子園 決勝大会 出場のご報告

人材育成室 係長 牛島 久美子

この度、令和8年1月10日に大阪で開催された「第3回病院ファンづくり甲子園 決勝大会」に出場しました！「未来を担う子どもたちへのキャリア教育の取り組み」をテーマに、地区予選で最優秀演題賞を受賞したことから九州・沖縄ブロック代表として全国の舞台で発表を行いました。



第3回 病院ファンづくり甲子園の  
詳細はこちらから



演題名：「ホスピタル×コミュニティ」-まちと響き合う織田病院のカタチ-

地区予選：令和7年11月7日開催（九州・沖縄ブロック）にて最優秀演題賞 受賞

決勝大会：令和8年1月10日開催（全国大会）に出場

## 【発表テーマ】遠ざかった病院と、「子供たちの未来」を再びつなぐ糸

今回、発表した活動は「新興感染症の流行で遠ざかった病院と地域を、「わくわく医療体験」を通じて再び強く結びつける」ことを目的とした取り組みです。感染症の影響により、子どもたちが病院に出入りする機会が減り、病院が子どもたちにとって「遠い存在」になってしまった現実に対し、当院は小学生を対象に「わくわく医療体験」を実施しました。聴診器で自分の心音を聞く体験や血圧測定、軟膏を練って容器に詰める調剤体験、救急車乗車、そして普段は立ち入ることができない手術室への入室など、五感を通じた体験は、子どもたちの心に大きな感動と「わくわく」をもたらしました。この活動を成功に導いたのは、「子どもたちの未来を応援したい」という強い想いで協力していただいた多職種の職員の皆様の温かい力のおかげです。

## 病院の役割を「治す場所」から「希望の場」へ

今回の受賞は、病院が本来の「治す場所」であると同時に、未来を担う子どもたちの「夢と希望を育む場」でもありたいという私たちの想いが、全国レベルで認められたことを意味します。またこの取り組みは、子どもたちの未来だけでなく、職員自身のやりがいや誇りにも繋がる大きな価値を持っています。

地区予選から決勝大会に至るまで、多大なるご支援をいただきました関係者の皆様、そして活動を支えてくれた職員の皆さん、ありがとうございます。私たちの挑戦は小さな一歩かもしれませんが、この一歩が子どもたちの夢を大きく育む確かな一歩になると信じています。これからも私たちは、病院と地域が深く連携し、互いに寄り添う「まちと響きあう織田病院のカタチ」を追求し続けます。今後とも、当院の活動への温かいご理解とご支援を、心よりお願い申し上げます。

## 第30回 祐愛会研究発表会

# テーマ「サービス改善 30年～質を上げる 深い信頼を得る～」

令和7年11月22日に、第30回祐愛会研究発表会(QC発表)を鹿島市民文化ホールSAKURASで開催しました。織田病院、ゆうあいビレッジ、高島病院清涼荘から全14演題の発表とゆうあい社会福祉事業団、末岡未来医療研究所所長の末岡榮三朗先生からの特別公演「患者さんに最適なゲノム医療の役割を考える」を執り行いました。研究発表は会場参加者と審査員からの上位得票数で決定され、最優秀賞1演題、優秀賞3演題が選ばれました。



**最優秀賞**

### STAT画像報告 ～チームで繋ぐ、命のバトン～

織田病院診療支援部放射線科 百武 成美

最優秀賞を頂くことができ大変光栄に思います。私たちの活動が少しでも診療の役に立ち、患者さんの利益につながるように、今後も努力していきたいと思っています。ありがとうございました。

**優秀賞**

### 説明は“読む”から“見る”へ ～多忙な現場でも行わる、動画活用による説明業務の改善～

織田病院外来・手術センター 宮崎 知子

この度はこのような素晴らしい賞をいただいたのも、スタッフの皆さんの協力のおかげです。ありがとうございました。  
外来業務の中で入院説明が1番時間を要していたのが現状でした。異音が悪い患者さまを早くベッドに休ませてあげたい、待ち時間を減らしたいという思いで、入院説明動画を取り入れました。  
これからも患者さまに寄り添い、より良い看護を提供していきたいと思っています。

**優秀賞**

### 介護職が行うケアの充実 ～飲食塗布等チェック表の簡略化と活用～

ゆうあい2階看護棟 田中 琴巳

賞を頂き嬉しく思います。  
この賞は部署の皆さんと一緒に頑張った証だと思っています。これからもより良くしていき、少しでも仕事をしやすく、利用者様にケアを届けていきたいと思っています。  
この度はありがとうございました。

**優秀賞**

### 爪切りと皮膚保湿ケアを標準化し 快適性と満足度を向上させる

高島病院2階病棟 香月 佐知子

今回は、このような賞を頂き光栄です。ありがとうございました。  
最初ほどのようにしたらよいか戸惑いもありましたが色々な方からの協力で取り組むことができ良い結果を出せたと思っています。今後も連携を取りながら継続していきたいと思っています。

### 合格おめでとう (2025年7月～12月)

| 氏名    | 部署名       | 資格(試験)名称   | 資格取得(合格)日   |
|-------|-----------|------------|-------------|
| 奥野 将  | 薬剤科       | 終末期ケア専門士   | 2025年11月15日 |
| 井川 涼花 | ゆうあい栄養科   | 調理師試験      | 2025年12月12日 |
| 前田 美空 | 栄養食事サービス部 | 調理師試験      | 2025年12月12日 |
| 久本 由香 | 看護部3階東病棟  | 認知症看護認定看護師 | 2025年12月23日 |

### 編集後記

2025年のグループ方針では「保健・医療・介護の各分野が一体的に提供できるように全分野においてAIとテクノロジーを活用できる人材を育成しDXを推進する」でしたが、本号でもとりあげているように、医療DXや生成AIの活用が各部署で進み、デジタル技術の活用が定着した1年だったように感じられます。医療現場を取り巻く

環境が急速に変化する中、デジタル技術を正しく理解し、活用できる人材の育成はますます重要になっています。特に生成AIは、業務効率化や新たな価値創出の可能性を秘めており、第6面で紹介している「ゆるAI会や生成AI勉強会」は新しい技術に触れ、参加者同士でどのような場面でAIを活用できるかなど、学びを実践へどうつなげるか

を考える有意義な時間となりました。こうした一つひとつの取り組みが、医療DXの推進と質の高い医療提供につながっていくことを期待しています。2026年も学びの機会を大切にし、変化を前向きに捉えながら新しい取り組みにチャレンジしていきましょう。

診療支援部放射線科 坂田 善和